

第4章 ニューカマー支援NPOにおける子どもとボランティアの関係 — コミュニケーションの視点から —

久保田 真弓

1. はじめに

本章では、TCCで行われている活動のひとつ、TCC/Re:C活動を中心に参加しているボランティアと子どもたちをとりあげ、彼・彼女らが活動やセンターを個としてどのように見ているのかを分析し、Re:Cが彼・彼女らにとってどのような場所なのかをコミュニケーションの視点から考察する。

2. 調査方法

(1) 分析手法

ボランティアや子どもたちがRe:Cをどのように見ているのか、その内面を知るためにPAC分析(Personal Attitude Construct: 個人別態度構造)とイメージマップを利用することとした。

PAC分析とは、「個」のアプローチとして注目されているもので、内藤(1997, 2002)が自身の社会心理学と臨床心理学の専門的立場から両アプローチを融合させて開発した研究手法の一つである。これは、一連の手順をとることにより、個人の態度やイメージの構造を測定・分析する方法で、90年代初めに開発されて以来、徐々に普及し、社会心理学、臨床心理学のほか、社会学、日本語学、異文化間教育学の研究者、教育現場の教員などにも広く利用されるようになってきているものである(内藤, 2004, p.54)。

PAC分析でとられる一連の手順とは次のようなものである。

- 1) 研究目的に即した刺激文を被験者に提示する。
- 2) 被験者は、刺激文を読んで自由に連想した言葉をカードに書く。
- 3) カードを重要度順に並べ替え番号を振る。
- 4) 2枚のカードをランダムに選び連想項目間の類似度を7段階で評定する。
- 5) 類似度距離行列によるクラスター分析をし、デンドグラムに表す。
- 6) 被験者にデンドグラム(クラスター構造)のイメージや解釈をしてもらい、実験者は総合的解釈をする。

このような一連の手順を踏む「PAC分析の最大の特徴は、下位技法として『自由連想』『多変量解析』『現象学的データ解釈技法』の3つを組み合わせたこと」にある(内藤, 2004, p.62)。これにより統計的に示された平均的な人間を扱うのではなく、「個」の内面を重視したアプローチが可能となったのである。さらに、本研究でPAC分析を利用する理由として、1)被験者による連想項目の内容やクラスターの解釈の仕方は、その人の対象の捉え方、すなわち体験の仕方を意味している(内藤, 2002, p.34)、2)少数者の質的分析に適している(内藤, 1997, p.64)、3)被験者間の差(変異)が大きい

場合に良い（内藤，1997，p.64）ことがあげられる。したがって本研究で被験者の内面を詳細に捉えるのには適した分析ツールであると思われた。

しかし、一連の手順の中で単語を連想するまでは、容易だが、クラスター分析した結果できたデンドグラムを解釈するのは、子どもにとって難しいと判断した。そこで、子どもには、イメージマップという分析手法を用いることにした。

イメージマップとは、水越ら（1980）が考案したもので、学習者の知識、スキル、概念をより直感的に意識的な方面から分析するツールである。一般的に、鍵概念の単語1語を紙の中央に書き、その単語から連想できる項目を自由に線で結びながら挙げていくという手順をふむ。そこから、連想された言葉の数で連想の流暢性を、連想された言葉の分野的広さから拡散性を、一つの連想に対する連想の深さを連想の構造化として、捉えることができる。例えば、学校教育で学習した内容がどのように定着しているかを評価するために、学習項目導入の授業前後に2回、イメージマップを描かせ、その変化から理解の度合いを評価することなどが出来る。

そこで、本研究では、ボランティアに対してPAC分析を、子どもに対してイメージマップを使用し、ボランティアや子どもらが個としてRe:Cをどのように見ているかを分析した。

(2) 被験者と調査日程

本章で記述するPAC分析の被験者は、ボランティア3人、ニューカマーの子ども1人である。これら4人の被験者に対するPAC分析には、以下の刺激文を使用した。

ボランティアに提示した刺激文

「あなたがボランティアとして、TCCで活動しているなかで、なにか得ることがあります。それはどんなものですか。どんな場面や状況で得ることがあります。頭に浮かんできたイメージや言葉を思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。」

ニューカマーに提示した刺激文

「あなたはたかとりコミュニティにどうしてきているのですか。来て何をしていますか。どんな話をしていますか。来ると、どんな気持ちになりますか。どんなことを考えますか。頭に浮かんできたイメージや言葉を思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。」

一方、イメージマップは、ニューカマーの小学生4人、中学生3人、高校生1人、そして、Re:Cと一緒に来ている日本人の小学生1人、中学生2人に対して実施した。したがって、イメージマップを行った子どもの被験者は、合計、11人である。

なお、これらの調査の日程は、表1のとおりである。

表1 調査日程

日付	被験者	分析
2005年8月9日	K, A	PAC分析 1,2回目
2006年7月8日	子どもたち 11人	イメージマップ
7月22日	E	PAC分析 1回目
	S	PAC分析 1回目
7月29日	E	PAC分析 2回目
8月5日	S	PAC分析 2回目

3. ボランティアを対象とした調査結果

(1) ボランティア A

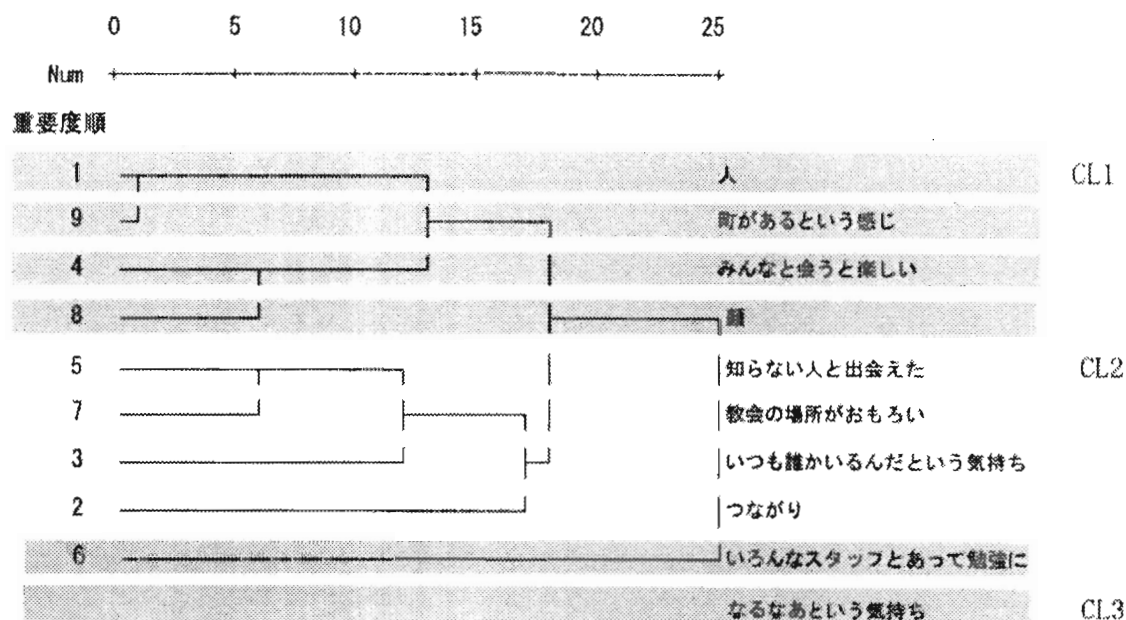
ボランティアAは、2004年にTCCにはじめて来て以来ずっとセンターに関わっている。ただし、はじめは参加者としてで、2005年よりボランティアとしてセンターに関わるようになった。

A氏は、「具体的なものは浮かばなかった」といいながら、9項目をあげた。そのなかで最重要項目にあげたのは、「人」である。得たものは何かと言う問いに対し、「人」であるという答えが返ってきた。また、「顔」という項目もある。「大学ではみんな表情が似ているけど、そうじゃなくて、ここではいろんな表情を見たな」と説明している。つまりセンターは、いろいろな背景の人の集まりであるとしている。そのほか「つながり」「いつも誰かいるんだという気持ち」「みんなと会うと楽しい」「知らない人と出会えた」「いろんなスタッフとあって勉強になるなあという気持ち」「教会の場所がおもしろい」「町があるという感じ」という項目が順につづく。これらをクラスター分析した結果、図1（次ページ）のようなデンドグラムになった。これらは、3つのクラスターに分けられた。クラスター1は、「人間」としてまとめられた。クラスター2は、「僕側に何か与えられていること」、とまとめられた。クラスター3は、「TCCの場にあること」、としてまとめられた。そして、これら3つの共通点は、「この場所」としてまとめられた。それでは、Aは、具体的にどのような表現でこれらをまとめたのか、次に見てみよう。

Aは、「子ども達の事が分かればすべて分かることだと思っていた。子ども達が、顔を覚えて僕のイメージをつかんだときにここにいられるな、足が軽くなった。僕はここに居てもいいんだなって思った。」という。一般的に、ボランティアへのインタビューで出てくる表現は、「求められているという実感」という言葉である。TCCは、序章で

記したとおり、震災後に作られた NPO 団体の集まりである。神戸淡路大震災直後は、なにか自分にできることはないかと全国からボランティアが集まったのは周知のとおりである。その際に集まったボランティアは、なにかしらお手伝いをするにより「求められているという実感」を得ていたのではないか。そこで、「求められているという実感がある」のかと問うたところ、A は「求められているという実感があるというよりもっと底辺（筆者下線）」と表現している。6 節で、この点に着目し考察したい。

図1 Aのデンドログラム



CL1： 人間、 CL2： 僕側に何か与えられていること、
 CL3： TCC の場にあること、 全体： この場所

さらに A は、「A がいれば、勉強教えてくれる、パソコン教えてくれる、というのが彼らにあってそれを向けてくるから来るんじゃないかと、彼らの中に僕が居るといのがよくわかるから来る」という。つまり、Re:C は、なにか技術や知識を単に教える場ではないということである。さらに、このような子どもとの人間関係ができるのには、それなりの時間がかかっている。A は言う。「それまでのスパンが長い。それまではわからうわからうとしていた。彼の中に僕が居るから、もう遠慮なく来てもいいや、彼らの中だけじゃなくて、場所自体に、僕が居る所がある」と述べている。つまり、なにかボランティアが、子どもたちに「働きかける」「活動する」という関係ではなく、時間をかけることによって互いに「ある・なる」の関係になっている(石井・久米・岡部、1996)。

このような人間関係は、学校ではないからこそ築けるのかもしれない。つまり NPO

では、学校のように学期があるわけでもないし、ましてや評価や結果をださなくても良い。ニューカマーのTとの関係について、Aは、「違う言葉でしゃべれる場所がある。ここにきたらまた別の言葉をしゃべれる。言葉は残っているからそれに体を合わせる、それが楽しい。僕らの中にTがいて、それに合わせたりずらしたりして楽しんでいるのかな（筆者下線）」と表現している。Tの中に映るAのイメージをA自身が捉えられるからこそ、そのズレを楽しむことが出来るのだろう。異質なものと出会ったときのズレが大切であり、それを否定するのではなく、楽しむことができることが重要なのであろう。

このようにPAC分析の結果、AがRe:Cに来て得たものは、この場所であり、人や場所に帰属するものであるようだ。Aがあげた9項目は、すべてプラスのイメージであった。

(2) ボランティア E

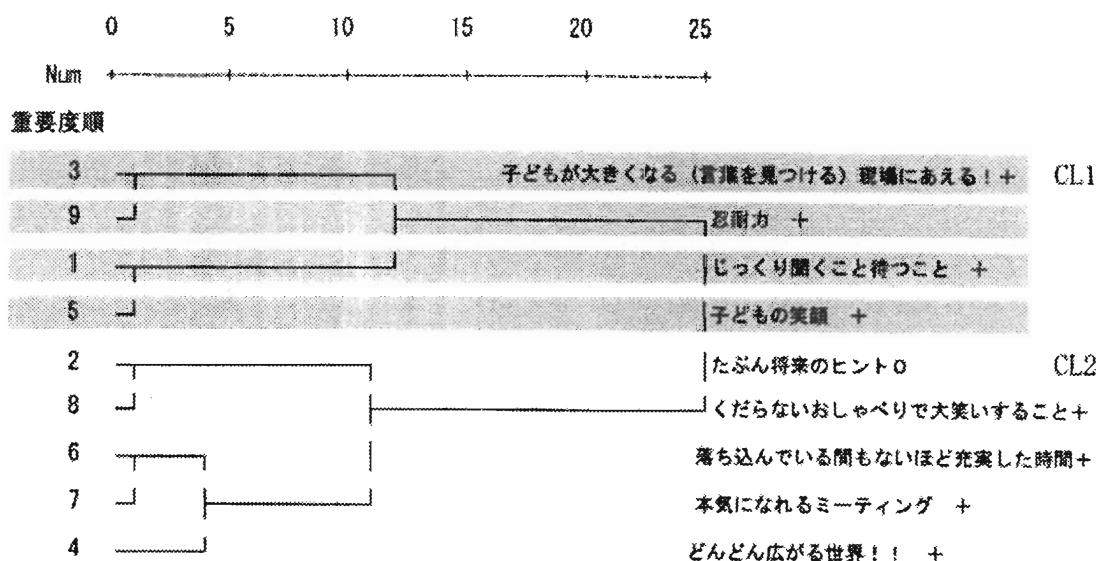
Eは、大学生で大学のプログラムにインドネシアとの交流があり、そのプログラムで2005年にインドネシアへ行った経験がある。その後、インターンシップで、TCC/FMにやって来た。その際にTCC/Re:Cにも来てほしいと誘われ、Re:Cの活動に携わるようになった。

Eは、刺激文を読み9項目を挙げた。それらは、重要度順に「じっくり聞くこと、待つこと」「たぶん将来のヒント」「子どもが大きくなる（言葉をみつける）現場にあえる！」「どんどん広がる世界」「子どもの笑顔」「落ち込んでいる間もないほど充実した時間」「本気になれるミーティング」「くだらないお喋りで大笑いすること」「忍耐力」である。これらのデンドグラムは、図2（次ページ）のとおりで、クラスターは、2つに分けられた。クラスター1は、「子どもに直接かかわること、自分の中に蓄えていること」として解釈された。一方、クラスター2は、「家に帰ってからハッと思うこと」である。クラスター1とクラスター2との共通点は、なかなか見付からなかったようであるが、15秒ほど考え、どちらもまた来ようという「原動力」になる、そこが似ているとまとめられた。

以下に、補足として行われた項目の詳細な説明を記す。「どんどん広がる世界」とは、勉強会で児童館の人の話を聞いたり、同じ活動にかかわっている他のボランティアの研究発表を聞き、色々な見方があることがわかることで、面白いという。「本気になれるミーティング」とは、Re:Cのミーティングのことで、子どもたちのことや、なぜ表現活動をさせたいのかを話し合うなかで、みな熱いものを持っていることを知り感心している。それは、Eが、所属している大学のボランティアセンターのなまぬるさと正反対で熱いものを感じるという。また「じっくり聞くこと、待つこと」「忍耐力」の項目で、Eは、「本音とかは、じっくりじっくりじっくりじっくり聴いて、そのあとにやっと出る（筆者下線）」と表現している。じっくりを4回繰り返して表現しているところに、聞く姿勢として待つことや忍耐力が必要であることが伺える。「子どもが大きくなる（言

葉を見つける。)現場にあえる」という項目では、「私もそうなんですけど。“最悪”という言葉で済ませてしまう。何が最悪で、何が嫌になっているのか、子どもといっしょに探していく (筆者下線)」と解説してくれた。E は、子どもたちが学校でちょっともめたとか、家族ではあまり話していないとか、なにかもやもやをかかえているときに、話すことで、もやもやが少し軽くなるのではないかと考えている。話したからといって問題が解決するわけではないが、子どもたちが、「話す」ことが重要だと思っている。子どもたちがもやもやについて語り、ボランティアの自分は、じっくり聞くという構図が、Eの中にあるようだ。そして、子どもが的確な語彙を探し表現できるよう子どもの語りに沿い続けるという態度がEに伺える。

図2 Eのデンドログラム



CL1: 子どもに直接かかわること、 CL2: 家に帰ってからハッと思うこと、
全体: 原動力

最後に、各項目にプラス・マイナスをつけてもらった。「たぶん将来のヒント」以外は、すべてプラスである。「たぶん将来のヒント」とは、就職活動のことでまだ自分自身もやもやしているのでゼロとなった。この項目は、最重要度順で「じっくり聞くこと、待つこと」の次に来る項目である。Eにとって、ボランティアとして子どもと接することは、何らかの形で自分に返ってくるものだと考えているようだ。これらからボランティアとしてのEと子どもとの関係性が浮かび上がっている。これについては、6節で考察する。

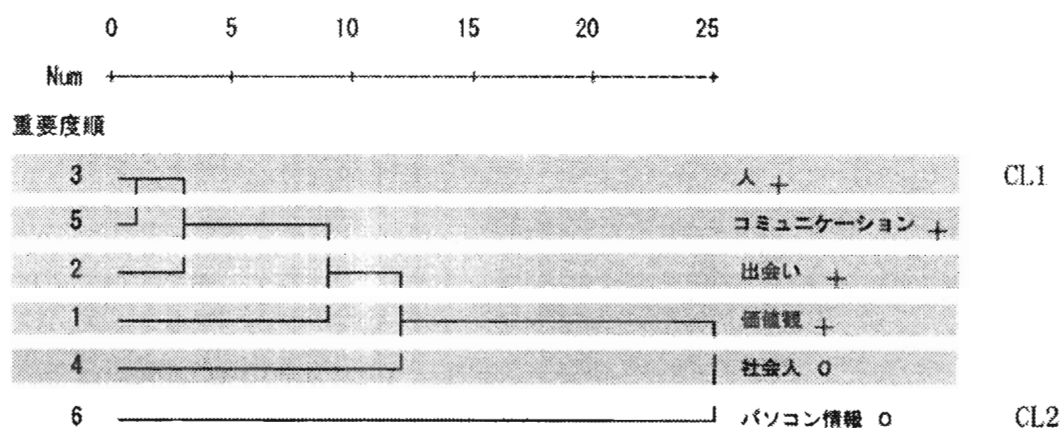
ところで、PAC分析という手法に関しては、「自分の中でもまとめられるので」良い

という評価を得た。「振り返るのは忙しくてできないときなど、なにか自分の中でゴチャゴチャだったものが整理された」と述べている。PAC分析は、このように単に被験者から情報を得るツールではなく、被験者の内面を整理する役割も担っている。

(3) ボランティア K

Kは、2005年4月からインターンでTCC/Fに関わっている。TCC/Re:Cには、2005年7月から関わりはじめ、Re:Cのコーディネーターを務めている。そのため、PAC分析の結果は、TCC/FとTCC/Re:Cの両方の体験からの意見となっている（図3参照）。

図3 Kのデンドログラム



CL1: 人、

CL2: パソコン情報

全体: 様々な人

Kの場合は、刺激文を提示した結果、6項目上がった。1番重要なのは、「価値観」である。いろいろな人が居るので、仕事をしていても面白いという。普段、当たり前だと思えることが当たり前ではなく、誤解も生まれる。しかし、いろんな人を見たりするのが、財産であるという。2番目に上がったのは、「出会い」である。外国の子どもたちとの出会いを指している。ニューカマーの彼・彼女らがいろいろな思いをしていることを知らなかったのも、その出会いが印象的だったようだ。TCC/Fでの出会いは、スタッフからの影響が大きいという。大学生や大学を出て企業に入った社会人しか知らなかったのも、NPOで働く人が、「当たり前の生き方をしていない人というイメージ（筆者下線）」があるという。「当たり前のルールをたどって来ていない人、自分の考えを持ってやっている人、すごいオーラを持った人たちの集まり」なので、影響を受けていると思うと述べている。「当たり前の」とは、どのようなことを指すのであろうか。なにが当たり

前でなにが当たり前ではないのだろうか、誰がそれを決めるのであろうか、その点を次節以下で考察してみたい。

そのほか重要度順に、「人」、「社会人」「コミュニケーション」「パソコン情報」という項目が上がっている。「パソコン情報」と言うのは、学校でパソコンについて習っているが、習ったことが、生かせてきているという実感があることを指す。クラスターは、2つに分かれ、クラスター1に「人」、「コミュニケーション」「出会い」「価値観」「社会人」が入り、クラスター2は、「パソコン情報」だけとなっている。「パソコン情報」を除いて「様々な人」でつながるといふ。

補足の質問で、なぜ「人」と表現して「○○人」とか「外国人」という表現にはならなかったのかを聞いた。するとKは、「人それぞれが個性的な人が多いから、別に外国人だから個性的じゃなくて、全員が個性的だな。何人という限定的ではなく全員が個性的」と説明している。個性的な集団ということで「常に刺激をもらっている場所だなあ」と見ている。

各項目のプラス・マイナスは、社会人が0で他はすべてプラスである。社会人は厳しいイメージがあるので、0で、他は全部楽しいことなのでプラスだといふ。

(4) まとめ

3名の被験者を対象としたPAC分析の結果から、ボランティアが、Re:Cで活動しているなかで得られたものの輪郭が浮かび上がった。それは、人との出会い、といえそうだ。人との出会いに関連したものが多くあがった。また、ここで出会うニューカマーの子どもたちは、小学生、中学生という異学年や異年齢のこどもたち、ベトナム人、日系ブラジル人というさまざまな民族の背景をもつ子どもたちである。しかし、具体的にそれらの名称は、一切出てこなかった。つまり単純に、「外国人」「ベトナム系の小学生」という表現ではくくれない、なにかもっと各個人の複雑な性格や背景が見えてくるがために、逆に「人」のような抽象度の高い表現の項目が多数あがったように思われる。

一方、Re:C活動では、子どもたちに、パソコンの使い方を教えたり、ビデオ編集などソフトの使い方を教えたりしている。しかし、どのボランティアからもこのような技術的な面でのやりとりから得られるものは出てこなかった。

また、「人」を理解するには、時間をかける必要があることがわかる。それぞれのボランティアは、忍耐強く、相手に合わせ、聞く姿勢を持っている。ただし、ボランティアは、意識して、「忍耐強く、相手に合わせ、聞く姿勢を持っている」のではないことが伺える。つまり、ここが、学校や悩み相談所との違いであろう。ボランティアは、何か子どもらの問題を解決するためにここにいるのではない。また、パソコン操作など、何かを教えようとして意気込んでここに来ているのでもない。むしろボランティアとしてなんとなくかかわるうちに、子どもらと情緒的にもつながり、自然と、親が子を思うように、ボランティアは、子どもらのことを思い、子どもらはボランティアのことを思

う関係が出来上がっている、といえよう。

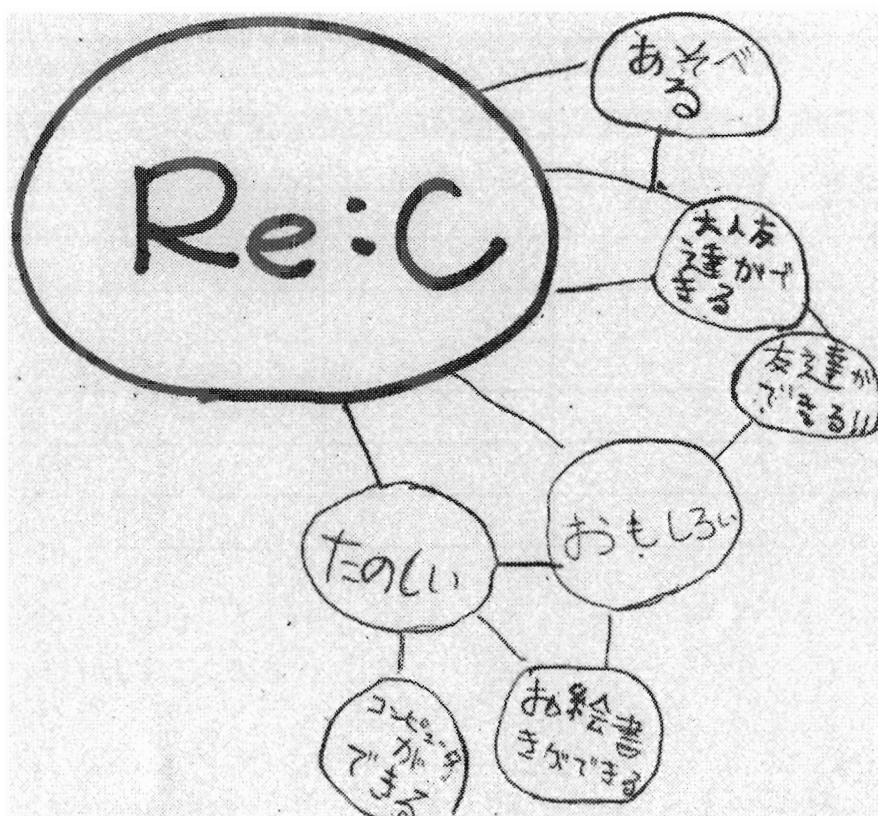
4. ニューカマーの子どもたちを対象とした調査結果

ニューカマーの子どもたちは、Re:Cをどのように捉えているのだろうか。本節では、子どもたち11人を対象に行ったイメージマップの調査結果を解説する。11人のうちニューカマーの子どもは、小学生4人、中学生3人、高校生1人であり、日本人の子どもは、小学生1人、中学生2人である。また、ニューカマーの子ども一人に対しては、PAC分析を実施したのでその結果も紹介し、あわせて考察する。

(1) 子どもたちが見る Re:C 活動

本研究では、中央の円に Re:C と表記し、そこから自由に連想する言葉を線で結ぶという方法で被験者にイメージマップを描いてもらった (図4参照)。

図4 ベトナム系小学校4年生のイメージマップ



被験者11名のイメージマップからあがった項目数は、122項目あり、そのうち39項

目は、小学生5人によるものである。これらの項目は、表1のように「人」「場」「活動」「気持ち」「その他」の5つのカテゴリーに分けられた。

表2 イメージマップ項目のまとめ

カテゴリー	細目	合計項目数 (小学生)	左記の割合 %	日本人による項目(小学生)	左記の割合 %
人		49 (6)	40 (15)	27 (6)	55 (100)
	スタッフ	15 (4)			
	友人	10 (2)			
	芸能人	24 (0)			
場		25 (6)	20 (15)	7 (2)	28 (33)
	たまり場	21 (5)			
	関係事項	4 (1)			
活動		22 (7)	18 (18)	6 (4)	27 (57)
	パソコン	7 (2)			
	ビデオ・映像	5 (3)			
	ゲーム	3 (1)			
	その他の活動	7 (1)			
気持ち		19 (16)	16 (41)	3 (2)	16 (13)
	肯定的な気持ち	9 (7)			
	否定的な気持ち	10 (9)			
その他		7 (4)	6 (11)	3 (3)	43 (75)
	OK/NG など	7 (4)			
総合計数		122 (39)	100 (100)	46 (17)	38 (44)

表2によると TCC/ReC:活動から連想される項目のうち、「人」に関する項目が40%を占めることがわかる。スタッフの名前やあだな、友達の名前、そして芸能人の名前がこの項目に入る。これは20%を占める「場」として子どもたちがReC:を見ている見方とも関連している。子どもたちは、ReC:をおしゃべりが楽しめる「たまり場」として主に見ていることから、必然的に芸能人など話題に関連した人の名前が多く上がっている。本来、TCC/ReC:は、パソコンやビデオ編集をする場なのだが、それらの機能を上げて活動の場としてみているのは、18%に過ぎない。

さらに、特徴的なのは、ReC:をおしゃべりが楽しめるたまり場と見ているのは、主に中学、高校生であり、小学生にとっては、むしろ気持ちを発散させたり(41%)、パソコンを使ってお絵かきをしたり、ビデオ編集をしたり、ゲームをしたりする場(18%)となっている。小学生3人が、「楽しい」「面白い」という肯定的な気持ちを書いている一方で、小学生2人が「うそ」「他の子はやさしくない」など否定的な気持ちを9項目述べている。詳細をみると小学生(ペルー系小学3年生男子)が上げた「うそ」は、イメージマップでReC:につなげて「死ぬこと」「おわり」という単語を書いた後、これを消して「うそ」と大きい字で書いている。真剣に「死ぬこと」を考えて書いたというより、調査者の顔色を見て描いたところがある。また、もう一人の小学生(ベトナム系小学3年生女子)は、「○○ちゃんしかやさしくない」など学校での友人関係の様子を連想ゲームのようにつなげて書いたため、否定的な気持ちが8項目と多くなった。いずれにしろReC:は、小学校低学年の本音が垣間見える場となっている。

ところで前述のとおり被験者11人のうち3人は、日本人である。ニューカマーの友達で中学生2人と小学生1人であり、表2によるとこれら日本人は、「人」に関する項目で55%寄与している。ニューカマーの友達とおしゃべりを楽しんでいるために芸能人に関する項目が多いが、特に本調査のイメージマップからは、ニューカマーの子どもたちと日本人の子どもたちの顕著な違いは、見られなかった。

(2) PAC分析からみたニューカマーS

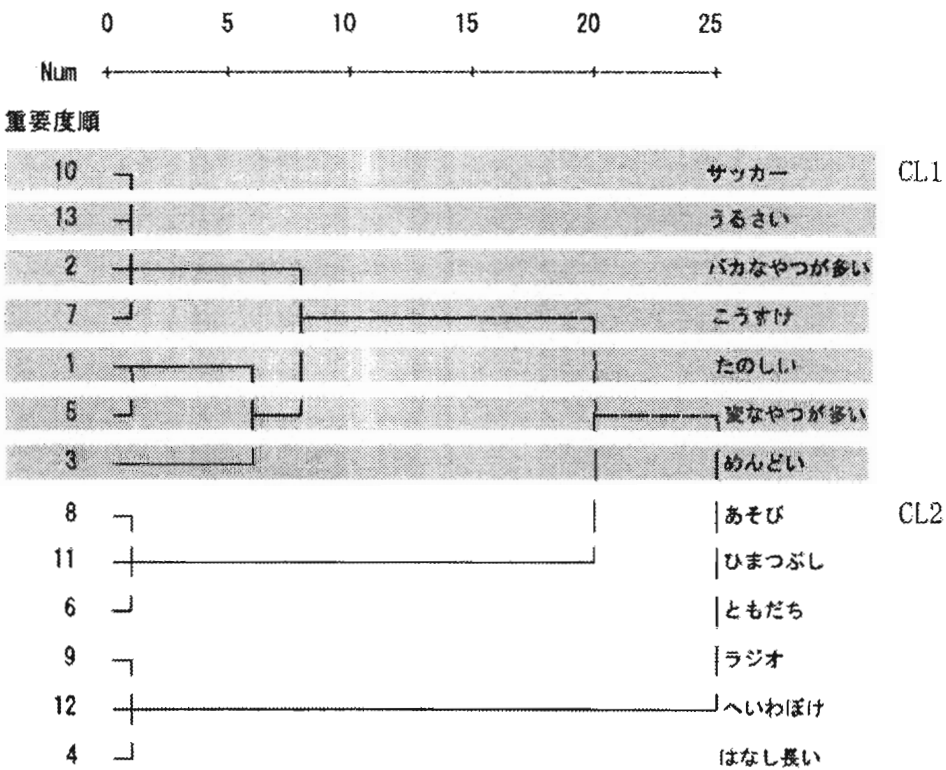
Sは、14歳でベトナム系中学2年生男子である。Sには、ニューカマー用の刺激文を提示し、PAC分析をした。Sは、7分間で13項目を挙げた。10項目目で、あと3個と言いながら、13項目を挙げた。13個でちょうどいい数だという。また、カードに書いている最中には「平和ボケしている、戦闘状態になった方が良くと思うなあ、平和ボケしているじゃん」と冗談まじりの発言をした。記入後、カードに書いた13項目を確認するため、筆者が、読みあげようとする、Sは、「僕が言ってやろうか?」と言って、自ら進んで読みあげてくれた。「1遊びやろ、2ラジオ、3サッカー、4こうすけ、5友達、6暇つぶし、7うるさい、8話しながい」。ここまで読みあげて「ほぼ文句やな」とつぶやく。「9バカな奴が多い」「10平和ボケ」「11変なやつが多い」「12めんどい」「13楽しい」と続いた。さらに13項目を重要度順に並べ、各項目間の距離を聞いた。その際に、各項目間を、1.非常に近い、2.かなり近い、3.いくぶん近い、4.どちらともいえない、6.かなり遠い、7.非常に遠い、の7段階尺度で聞いているのだが、いくつかやっているうちに「1と7しか使ってないなあ。」という気づきがあった。

13項目は、2つのクラスターに分けられた(図5次ページ参照)。クラスター1は、「遊びみたいな感じ、」と即答でまとめられた。「サッカーで遊ぶだろう。うるさいやつと遊ぶだろう。バカなやつと遊ぶ。こうすけと遊ぶ。遊んだら楽しい。変なやつと遊ぶ。遊んだあとめんどいや」という。「めんどい」とは、疲れるとはちょっと違い動くのがめ

んどい、ということで、サッカーなどをやった後に、めんどくなると説明してくれた。さらに「暇つぶし」は遊び、「友達」も遊び、とつながっている。この結果については「つなげる気はなかったけど、うまくつながったな」と本人もびっくりする。クラスター2には、「ラジオ」「平和ボケ」「話しながい」が入る。「ラジオって、何かいいこと言っていて、しかも話が長いじゃん」という。TCC/FM に出演した経験からの発言である。クラスター1 とクラスター2 の共通点は、と聞くと、「Re:C でつながる」と即答した。彼の中に Re:C 活動がしっかり根付いているのが伺えた。さらに、学校での遊びとここでの遊びについての違いを聞くと、ここでは、「ずっと遊んでるわけじゃないからなんかおもしろい（筆者下線）」という。

いろいろな人に出会い、たわいもない遊びやおしゃべりの中でも、なにか学校では得られないものがここにあるのだろう。

図5 ニュカマーSのデンドログラム



CL1: 遊びみたいな感じ、 CL2: 何かいいことをいって話が長い
全体: Re:C

(3) まとめ

ニューカマーの子どもたちを対象としたイメージマップと PAC 分析の結果から、彼らは、Re:C を学校とは違う場として捉えていることがわかった。イメージマップでは、Re:C という単語から始めてさまざまな単語を連想してもらった。そのなかで中学生や高校生は、たまり場としてみていることがわかった。おしゃべりや悪ふざけをする場なのである。おしゃべりの相手や話題のなかにボランティアの名前やあだ名が入り混じっている。そこから大人のボランティアを相手に子どもたちが安心して遊んでいる様子が伺えた。また、小学生にとっては、本音の気持ちが出る場でもある。それをしっかり受け止めてくれるボランティアの存在が欠かせない。

これらの結果は、Re:C がどのような場所かを被験者 S に聞いた PAC 分析の結果とも一致した。ボランティアのあだ名や遊びを中心とする項目を 13 挙げ、最後に Re:C と即答したあたりに中学 2 年生がみる Re:C の位置づけが検証できる。

5. 「原初的コミュニケーション」を捉える場

鯨岡 (1997) は、子どもと養育者のさまざまな関係を観察し、そもそも人間が生まれ、言葉を発するまでの段階でどのようなコミュニケーションが起きているのかを分析し、考察している。本節では、鯨岡の論を概説し、次節で本研究との関連を述べる。

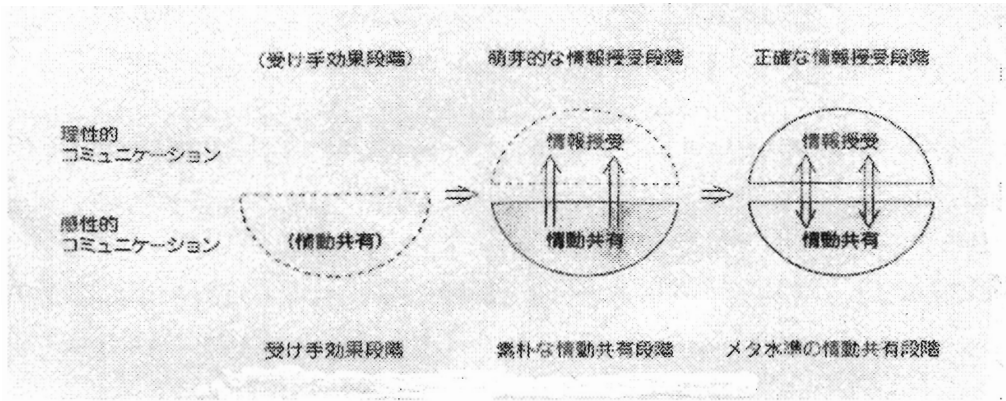
新生児が真っ赤な顔をして力いっぱい泣き出したとしよう。母親は、その泣き声を聞いてとっさに抱きかかえお乳を含ませる。このような光景はよくあるが、この場合、コミュニケーションは、どのように成り立っているのだろうか。新生児はまだ、言葉を話せないのに、母親に自分の欲求を伝えている、ように見える。しかし、鯨岡によると、このような場合、乳児は、おなかがすいたという状態になり、身体内部のエネルギーがあふれ出るようにおもわず泣き叫んだにすぎない、という。まだ、おなかがすいたと意図的にシンボル(言葉)を使って表現できる段階ではないのだ。したがって、乳児の泣き声すなわち表出行動は、漠然と母親の方に向かってにすぎない。鯨岡は、このような状態を表現といわずに表出、意図といわずに志向性という用語を用いて説明している。新生児の感情のように「表出性や志向性は、主体の内部にそのように表出したり、そのような動きにならねばならないある状態、つまり欲求や要求や目的などを含む広義の情動があって、それらに基づけられて立ち現れてくると考えることができる」と述べている (p.78)。

一方、母親は、無意識のうちに「いつもすでに」関心が赤ちゃんに向けられてしまっている状態にある。したがって乳児と母親のような関係では、「一方の身体にあらわになっている表出や志向は、相手の身体の感応を媒介することによって、いわば相手に向かって要求を伝達したのと同じようなある種の『受け手効果』を持ち、その結果、そこから具体的な応答が返っていく可能性が生まれる」(p.80)。つまり、乳児と母親のコミュニケーションの場合、意図的に相手に情報を「伝えた」のではないことから、鯨岡は、

このようなコミュニケーションは、養育者の受け止め方を起点にして始まっていると考えたほうがはるかに自然だと考えている (p.94)。つまり、従来の情報の授受に視点を置き、情報の送り手からコミュニケーションを捉えていた発想とは異なる視点である。さらに鯨岡は、「生きた身体の出表性や志向性（その動きの持つ方向性）は、その主体の意図的な表現や意図した行為を当然含みながらも、それをほみ出る面を持つ」(p.78)ことを指摘している。そして、こどもと養育者という非対象の係に着目し、メタ水準の関心の有無、関心の深さの違、養育する側の気持ちの持ち出し方の違によって、最終的な関わり方に差異が生まれる可能性があるとして述べている (p.100)。関心には、相手に対して「これからそこに向けての関心」と「いつも、すでに向けてしまっている関心」の2つがある。たとえば、受験を控えた中学3年生は、受験が自分自身にとって現実のものとなれば、受験が関心事となり、はれて高校生になればその関心は自然とうせるものである。これが前者の関心である。後者の関心は、親が子を常に思う状態で、たとえ物理的に離れていても、たとえ子どもが成長し独立しても、子は、親にとって「いつも、すでに向けてしまっている関心」の対象であることをさす。この後者の関心を前者の関心と区別して鯨岡は「メタ水準の関心」と呼んでいる (p.96)。つまり、養育者の身体が常に子どもにたいして漠然と開かれた状態であることをさす。だからこそ、母親はたとえ台所仕事をしていたとしても子どもの危機的な泣き声を瞬時に聞き分けられ、走り寄るといった行動が出来るのだ。さらに、その際にそばにいる父親が、そのなき声を聞いても「危機的」かどうかの判断が瞬時につかなかったとしたら、それが関心の深さの違を意味する。つまり母親は子と接している時間が長くさまざまな状況での泣き声を聞いているので、それらの体験が蓄積しており、瞬時に危機状態を判断できることになる。もちろん父親も泣き声を聞き、子の周りの状況から判断し、あきらかな危険性は察知できるだろう。また、本を読んで知識として対処方法を知っていたりする。ただどこまで泣かせて、つまり、じらしてよい「危機」なのかなどを瞬時に判断する点で違があるとしたら、その違が、メタ水準の関心の「深さ」の違となっている。そして、走り寄った母親がとっさに子を抱きかかえ「痛い！痛い！」とって子の頭をさすっていたら、母親は「いま、この瞬間に」母親から子の気持ちに成り代わって代弁していることになる。(3章の共感能力は、これに近い概念である。)これは、例えば父親が、子を抱きかかえ「お前、痛かったのか？かわいそうにな・・・」で済まし、自分の気持ちを自分の側にとどめたままにしているとしたら、これらが、養育する側の気持ちの持ち出し方の違になる。子どもは、自らのもつエネルギーで痛いことを泣いたり手足をばたつかせたりして表出し、それを漠然と傍らの両親に向けて（志向して）いる。それを受けて両親や周りの大人が対応するのだが、メタ水準の関心の有無、関心の深さの違、養育する側の気持ちの持ち出し方の違によって泣く子への対応が異なり、それが積み重なって出来上がる係が、その子への固有の係として築かれることになる。

ところで、コミュニケーションには、感性的コミュニケーションと理性的コミュニケ

ーションとがあることが知られている。それを子どもの発達論的な立場からみると図6のようになる (p. 168)。



まず、さきほどの新生児の例のように最初の段階では、感性的コミュニケーションが現れる。子どもが言葉を覚え始めると次第に、理性的コミュニケーションが現れてくるが、まだ萌芽的な段階であるのが第2段階である。さらに言葉を獲得してくると、理性的コミュニケーションが確立し、感情を言葉で巧みに表現することが出来るようになる。それが第3段階である。鯨岡は、図6の説明で、第2段階と第3段階の感性的コミュニケーションは、微妙に違うこと、さら第3段階に至っても初期の素朴な感性は、たとえ大方が鈍化しても中心には、残っているだろうと説明している。

この原初の形ですっと残っているものを鯨岡は、「原初的コミュニケーション」と呼んでいる。つまり、「原初的コミュニケーション」の定義は、「主として対面する二者のあいだにおいて、その心理的距離が近いときに、一方または双方が気持ちや感情のつながりや共有を目指しつつ、関係を取り結ぼうとするさまざまな営み」である(p. 163)。したがって、子どもと養育者の関係だけでなく、大人になっても夫婦や親友、恋人同士のような心理的に距離の近い間柄では見られるという。一般に、私たちは、成長するにつれ、子と養育者が目を合わせたただけでおもわず微笑み、うれしさを共有できるという素朴なコミュニケーションスタイルから、言葉を介して効率的にかつ実用的に気持ちを整理して相手に伝えるコミュニケーションスタイルに変容している。理性が働き言葉をたくみに操れることから、子どものころの素朴な感性は、かなり風化し変容しているが、それでもその中心部分は、存続し続け、理性の元でかえって純化した形で感性的コミュニケーションの中に持ち込まれている (鯨岡, p. 171)。だからこそ異文化コミュニケー

ション分野でも「共感」能力は扱われ、感性のコミュニケーションが重視されている（ハウエル、久米、1992）。

6. コミュニケーション上の「ズレ」を楽しむ関係

前節では鯨岡の子どもと養育者との関係から導かれたモデルを提示したが、本節ではそれを利用して、Re:C のボランティアと子どもの関係をコミュニケーションの視点から考察する。

そもそもボランティアは、自らの意思でNPOを訪れている。その意味でニューカマーの子どもたちに対して開かれた気持ち、すなわちメタ水準の関心があるといえよう。しかし、ボランティアには、学校の教師と違い、ある知識をある期間内に伝授し、一定のレベルまで引き上げ、理解させる義務のような責任はない。その点で、ボランティアは、学校の教師とは少々違う立場で「いつも、すでに」気持ちがニューカマーに対して開かれた状態であるといえよう。そこへさまざまな欲求をもった子どもたちが現れる。子どもたちの中には、もやもやした気持ちのすべてを言語化できずにいる場合があるだろう。その場合、たとえ正確に言語化できなくても非言語をも駆使してうつぶんを表出するかもしれない。小学生の子どものイメージマップで見たように、学校での友達関係のギクシャクが、思わぬところで出てくる。そのとき、ボランティアとの信頼関係が成立していれば、子どもの表出は、ボランティアに向けられる。その際にボランティアが、その表出事項に気がつくかどうかは、ボランティアのメタ水準の関心の深さによるといえよう。つまり、ボランティアのそれまでに培ってきた体験や意識によるところがあるかもしれない。また、「いつもすでに向けてしまっている関心」の広さは、ボランティアによって違うのかもしれない。さらに子どもとの関係を築く際にどのような態度で臨むかの違いが、気持ちの持ち出し方の違いに表れるのだろう。

TCCでは、3章でみたように20代、30代のボランティアの定着率が良い。逆に定年退職した男性は、一時、参加してくれるものの継続に繋がらない。その点をスタッフのKは、「リタイア後のおじいさんが参加してくれたけどうまく巻き込めなかった。」と表現しており「何がちがったんだろう・・・子どもと仲良くなれるかってことが分かれ目なのかな」¹と分析している。唯一、定年退職した男性で継続的に関わっているHは、ある子どもとの出会いがきっかけで継続して参加するようになり、本人もそのきっかけについてよく他の人に話しているという。ボランティアAのPAC分析で見たとおり、求められているという「実感があるというよりもっと底辺（筆者下線）」での関わりであり、相手の子どものなかに自分がみえるからこそ常に子どもが気がかりな存在になっているのである。そのような状態で、子どもが何らかのうつぶんや楽しいことを言語や、態度などの非言語で表現（表出）すると、ボランティアは、メタ水準の関心の深さから、それを受けとめ、応えることが出来る。このときに原初的コミュニケーション、すなわち「受け手効果」から始まるコミュニケーションが成立しているといえよう。

¹ 2005.6.7 Kへのインタビュー記録より

このような「受け手効果」から始まるコミュニケーションは、教師と生徒、親と子、という明確で固定的な役割を基盤とした関係性では、起こりにくいかもしれない。このような関係では、知識、技術、力、権力などの面で明確な上下関係があり、言語コミュニケーションは、送り手の意図からはじまるのが通常であるからだ。一方、ボランティアの場合は、ボランティアの心情のなかにも人生への迷いや悩みがあり、それをかかえた生身の人間として子どもたちに対峙しているところがある。もちろん教師や親にも同様の迷いや矛盾は多々あるが、それらのうちのなかでも教師や親という役割を前面に出して子どもと対峙しているところが、ボランティアと違う点であろう。したがって、定年退職者のように、時間に余裕が出来たので誰かのために働きたい、役立ちたいという自分の欲求のみを追求する形で子どもらと関わろうとすると、子どもとの柔軟な関係性が築けず、継続に繋がらないのかもしれない。

すくなくとも TCC におけるボランティアと子どもとの関係は、「支援する人」「支援される人」という固定した上下関係ではない²。ボランティア K は、TCC で働く人たちが、当たり前前の生き方をしていないと驚いている。「当たり前」ではないとは、教師と生徒、親と子のような固定的な役割で物事を判断し、相手と関わることではないと解釈できる。ボランティア E の PAC 分析結果では、子どもの話をじっくり聴き、忍耐強く待つことの大切さが上がっている。子どもらが「最悪」「むかつく」と簡単に表現するなかで、その背景の真意を受け止める大切さを述べている。そのようなコミュニケーションをとおして築く人間関係の築き方がボランティア E にとって「将来のヒント」になるという。

ボランティアと子どもとの柔軟な人間関係を示す例として、次のようなことがある。中学生のうち女の子は、「ハンゲーム」というネットゲームに、男の子は、「モンスター・ハンター」というロールプレイングゲームをしていたときである。ボランティアが、「おもしろい！なにこれ？」と言いながら、ハンゲームとは何かを理解しようと画面を覗き込むもののポイント表などが複雑でよくわからないことがあった³。つまり次々に発売されるコンピュータゲームを子どもらは苦もなく操り楽しんでいる状況があった。

本田 (2005) は、携帯電話や電子メールなどのコミュニケーション革命において子どもは大人よりその方向を先取りして、その変化の流れの先に位置していると述べている。だからこそ、その変化についていけない大人との時間的ずれが、「両者のきしみを生じさせて、時にコミュニケーションの断絶あるいは不能とみえる状況を招き寄せ、大人たちを困惑させているのではないだろうか」(p.61)と述べている。そしてそのようなコミュニケーションの発信の仕方が違うために、子どもがたびたび起こす種々の殺傷事件でみられるように子どもの態度の変容に親が気づかずにいると指摘している。

その点、Re:C では、子どもらが先取りし、優越感を味わえるコンピュータゲームに

² スタッフ K の考えでもあり、TCC に来た子どもが大人と接して成長していける地域の場合としたいと願っている。2005 年 2 月 2 日のインタビューから。

³ 2005 年 7 月 2 日の Re:C:サロンの記録より。

ボランティアが興味を示し、あえて相手(子ども)に合わせている。しかし、だからといってボランティアは、子どもを野放しにしているわけではない。定期的な勉強会やスタッフやボランティア同士の情報交換を密にし、それぞれの子どもの状態を的確に捉えて対応している(3章参照)。そこにメタ水準の関心の深さの違いが現れている。コーディネーターを中心にじっくり時間をかけ子どもらに向かい合っているのである。

このようにボランティアの中でもシンボル活動で行われる理性的コミュニケーションだけでなく感性的コミュニケーション、さらに言えば、原初的コミュニケーションが取れる者が、継続して ReC:に参加しているのかもしれない。通常のシンボル活動によるコミュニケーションからズレているまたははみ出している部分、すなわち子どもらの表出性や志向性のあるコミュニケーションに気づき、そのズレを楽しめるからこそ継続的に子どもらとかかわっているといえよう。

一般に、異文化コミュニケーションの状況では、言語や文化・習慣の違いからストレスが生じ、留学や技術移転などの目的を達成できないときがある。このような場合、相手との違いは、負の気持ちしか喚起しない。しかし、ボランティアの場合は、ニューカマーという相手との文化的な違いだけでなく、さらにミクロのレベルのコミュニケーション上のズレを尊重し、そのズレをも楽しむ心のゆとりがあるといえよう。だからこそ PAC 分析で見たとおり、人との関係を楽しみ、どんなことでもゆっくりじっくり子どもと関わっていきこうという姿勢があるのである。

さらにこのズレに気づき、ズレを楽しむには、時間をかけて子どもたちと信頼関係を築かなければならない。それは単なる物理的な時間だけを言うのではなく、自己開示などボランティアの気持ちの持ち出し方にも関わっている。このようなボランティアと子どもの関係性が、メタ水準の関心の有無、関心の深さの違い、支援する側の気持ちの持ち出し方の違いによってさまざまに保たれている場が TCC であるといえよう。

【引用文献】

- 石井 敏・久米 昭元・岡部 朗一(1996)『異文化コミュニケーション---新国際人への条件』有斐閣選書
- 鯨岡峻(1997)『原初的コミュニケーションの諸相』ミネルヴァ書房
- 内藤哲雄(1997)「PAC 分析の適用範囲と実施法」『人文科学論集<人間情報学科編>』信州大学人文学部 31号 p.52-89
- 内藤哲雄(2002)『PAC 分析実施法入門 (改訂版)』ナカニシヤ出版
- 内藤哲雄(2004)「PAC 分析の適用範囲と実施法」『マクロ・カウンセリング研究』第3巻、マクロ・カウンセリング研究会 5月
- ハウエル,ウィリアム・S.、久米 昭元(1992)『感性のコミュニケーション』大修館書店
- 本田和子(2005)「異文化ではなく文化を先取る者」『現代のエスプリ 子どものいる場所』8 至文堂
- 水越敏行・吉崎静夫・三宅正太郎(1980)「映像市長能力の形成と評価に関する実証的研究---みどりの地球の継続視聴から----」『放送教育研究』第10号, pp.1-20.